

司教ら9人殉教75周年

式典に深水神父、池長大司教の書簡読む オランダ

戦時中に中国・河北(ホーペイ)省の正定(チョンティン)で旧日本軍に殺害されたオランダ人司教と司祭ら計9人の列福運動が進んでいる。その一人は新潟知牧区(現・新潟教区)の第2代知牧区長の兄弟に当たる。10月13日と14日にはオランダで殉教75周年を記念する式典があり、日本からも深水正勝神父(東京教区)が参列した。

旧日本軍が中国で殺害

9人はフランス・シュラウエン司教(聖ピレンシオの宣教会)と、主に同会のクロアチア、フランス、オランダ、ポランド、スロバキア出身者。司祭、修道士、信徒がおり、厳律シトー会(トラスピスト)の神父1人も含まれる。

その中でもトマス・チエスカ神父(聖ピレンシオの宣教会)は第2代新潟知牧区長、アントン・チエスカ神父(1877~1941年)神言修道会の兄弟に当たる。式典はまず、シュラウエン司教の誕生日でもある13日夜に、ドイツ国境近くのパンニンゲンにある聖ピレンシオの宣教会オランダ管区本部で、



オランダのブルクハイゼンフォルストの教会で行われた殉教75周年の式典で

9人の殉教を描いたマンガ伝記の贈呈式があった。同書はA4判ほどの大きさで約50ページ。数カ国語で発行され、マンガで同司教の足跡を紹介している。

14日には約20キロ北東にあるシュラウエン司教の故郷、ロットウムに近いブルクハイゼンフォルストの古い教会で行われた。

まず9人の肖像を掲げた各国の司祭らが入堂。教皇庁福音宣教省の次官で香港出身の韓大輝(ホン・タイファイ)大司教が主司式した。

ミサ中、深水神父が日本カトリック司教協議会会長

の池長潤大司教の書簡を代読。日本による事件への謝罪の意を示し、列福運動のために祈ることを伝えた。

同教会では脇祭壇に殉教を表した壁画を描き、記念礼拝堂とした。そこに9人の肖像画とシュラウエン司教の遺灰を安置、池長大司教の書簡も拡大して枠に収め、掲げられた。

深水神父は「行ってよかったと思います」と振り返る。「事件のことは知りませんでした。中国では同様の出来事がもっとあったのではないでした。」



池長大司教からの書簡を代読する深水神父

ようか。終戦から70年近くたち、日本の教会ができることをもう一度考えざるべきではないでしょうか」と話していた。

同神父は故白柳誠一枢機卿と共に中国を何度も訪問した。またインドネシアにおけるオランダ人

戦争被害者との和解にも関わってきた。

軍の調査に司祭同行

欧州に残る資料によると、9人は1937年10月9日、正定に入った日本軍が教会施設にいた避難民の中から200人の女性(少女を含む)を引き渡すよう求めたことに抵抗したため、目隠しされて首にロープを巻かれ、トラックで約3000人離れた仏塔近くに連行された。

事件後、フランスや教皇庁は真相の究明などを日本に求めている。殉教から1カ月後の11月19日、カトリック信徒の横山彦真少佐(後の中佐)率いる日本軍の「宣撫班」が現地入りした。後の大阪教区大



正定を訪れた田口神父が神学校で「信仰による日中親善」を力説。左に日本軍宣撫班の姿がある(「カトリック画報」より)

司教で枢機卿にもなった田口芳五郎神父(当時は東京教区)も同行している。

田口神父は訪問の様子を「日本カトリック新聞」(本紙の前身)や「カトリック画報」で詳しく報告しているが、9人の死については触れていない。

ところが欧州側の資料では、横山少佐は殉教した9人のために天津の司教を招いて同年11月22日、正定で追悼のミサをささげている。田口神父は司式者の補佐をし、日本軍関係者約30人(うち

告知板

東京

▼星野富弘 花の詩画展 in お茶の水「いのちより大切なもの」前期 11月2日(金)~12月30日(日)、後期 1月4日(金)~3月2日(土) 午後7時、OCCビル5階千代田区。一般学生五百円(中学生以下無料)。 ☎03-5341-6911
▼顧問司教・高見三明 大司教による第1回NCK(日本カテキスタ会)